
戦極姫 ごったに短編集

坂川 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦極姫 ごつたに短編集

【Nコード】

N2557S

【作者名】

坂川 一

【あらすじ】

戦極姫にはヒロインが多い。それにもかかわらず創作は少ない。あつたとしてもなぜか、いややはりというべきか上杉が目立つ。結果筆者好みのキャラがほとんど脚光をあびていない。それなら自分で書いてしまおう。いろんな姫武将を出したいがために短編集という形にしてみました。

義弘

現代（前書き）

いきなりですが現代パロディ。ヒロイン義弘でちょっとだけ下が入ってます。

義弘 現代

時は2011年

薩摩の名門・島津家が天下統一を果し、戦乱の世が終焉を迎えてから四百年。

武士の治世が終わり二度の大戦を乗り越え半世紀と少したった極東の国・日本。

弓状列島の最南端、首都鹿児島のある一軒家……

三月最後の日曜日、俺こと天城颯馬はさわやかな朝には目もくれず情眠をむさぼっていた。

意識が大体半分くらい覚醒しているが、起きるつもりはない。いや、まあ、少しはあるのだがふとんが快適すぎて出られない。

もつともこんな幸せは長くは続かないということは長年の経験から理解していた。理解していたが故に起きようとは思うのだがやはり起きることはできず再び眠りの世界へ旅だ……

「起きなさいよ颯馬ア……………」

顔面に衝撃が走った。

「うごぶえ？」

いざ眠りの園へ旅立とうというその瞬間を狙ったかのような襲撃を受けた。

完全なる不意打ちに意識が一気に覚醒しあわてて体を起こす。

「痛ってー！なんなんだいったい！？」

「遅い遅い遅い！今何時だと思ってるの！」

襲撃者が怒鳴っている。

そこにいるのは小柄な女性。その名も島津義弘。つややかな黒髪を肩口ほどで切りそろえている。顔立ちは整っており、はつきり言っている。相当な美人だ。

胸のほうは少し残念だが……

「今なんか失礼なこと考えてなかった？」

じとーとにらんでくる義弘。

なぜこんな美人が俺の前にいるのかというと、何と俺たちは幼馴染みという奴なのだ！

しかもただ親同士の仲がいいというわけではなく、先祖代々の付き合い、すなわち彼女の先祖、島津義久が天下を取ったときからの付き合いというわけだ。

ちなみに天城家は元をたどれば島津歳久のこどもが天城性を名乗ったことから始まっている。

俺は小学校の頃に両親が他界し、それ以来この島津家で居候をしている。

高校卒業を機に独り立ちしようとしたが、なぜか大黒柱のお父様に激しく反対された。

普通娘と男が一緒に暮らしていることに反対するだろうに。しかもあんた普段いないだろ！

余談だがこの家には義弘以外にも女の子が生活している。長女・義久、三女・歳久、四女・家久、義弘は次女。

名前からわかるように天下を統一した島津四姉妹から名を取っている。俺の名もまた戦国姫武将・島津四姉妹の夫にして軍師の天城颯馬つまり俺の先祖からもってきたらしい。

おかげで同級生からかなりからかわれた。

「いやまったく。それより遅いつて何だよ？今日は何もない日だろ？しかもまだ七時半だ」

俺も義弘もこの前高校を卒業し、四月から地元（といっても首都）の名門大学への進学が決まっている。

今の俺たちは、高校にも大学にも行っていない、当然課題もなければ部活もない悠々自適な暇人生活をエンジョイできるはずなのに・・・

「こんなだらけた生活態度で新生活を迎えるつもり？ほらシャキッとする！もうみんな起きてるんだからね！」

「はあ。わかったよ。今行くよ」

こいつは昔からこんな奴だった。妙にまじめで、説教くさい。おまけに口より先に出る性なのだ。

幼少より空手の道場に通い、高校では合気道で全国王者に輝いている。

そんな格闘少女に殴られれば俺のような文系男子はひとたまりもない。手が出る前に素直に従った方が良さそうだ。

そのとき太ももの上辺りにずっしりとした重みを感じた。布団越しに伝わる重量感。

その正体を見たとき、俺の中に戦慄が駆け抜けた。

「これは、辞書？ま、まさか、おまえこいつで俺を？」

「あ、気づいた？少しいつもと趣向をかえてみたのよ。どう？感想

は？」

「いてえよ！感想とかこれ一言で全てを表せるよ！だいたいなんで辞書なんだよ！殺す気か！」

あつけらかんと感想を求める義弘に全力で抗議する。

たしかに中二のころはじめてyou。ubeの存在を知ったとき、睡眠時間を削ってガンガンアニメ見まくって出会った某アニメのヒロインがこんなことしてたよ。義理の兄に向かって。設定も俺と多少かぶってて妙な親近感わいたし、仲良さそうだなーとか思ったよ！でもリアルでされたらどうよ！寝てるところに辞書降ってきたら、当然軽く死ねるだろ！角とか凶器になるんだぞ。ヴェス。リアには本の角で魔物殺してるようなまできいるんだぞ。

それにしてもあのアニメ放送されたの2003年、おれが小五の時らしいね。あれから8年か。仮にそのとき原作をやったのが対象年齢ギリギリの十八歳だとすると今は二十六、自由人最後の歳である二十二歳とすればもう三十だ。おれも年取るわけだよなあ。

「だーかーらー。寝るなっ」

「ぐぼっ！？」

強烈なストレートが鳩尾を打ち抜いた。

「おま、ちょ、寝てないって・・・」

ヤバイ。きれいに入りすぎた。息ができない。

少し黄昏ただけでこれとは、気が短いにもほどがあるぞ。義弘。

「あんたがさっさと布団から出ないのが悪いんでしょ！！もう大学

生なんだからしっかりしてよね」

確かにその通りなのだがそれを言うならすぐ人を殴るおまえはどうなんだ？

脳裏をかすめた疑問は口には出さない。火に油を注いでもこちらが危険になるだけだ。

命は大事だ。うん。

なので今度こそ本当に布団から抜け――――――――――
――――――――――出せなかった。

布団をどかさうとした瞬間に重大なことに気がついた。気がついてしまった。

今俺は花咲ける青少年がもつ朝特有の緊急事態に陥っている。

しかも目の前には多少暴力的とはいえ年頃の美少女、しかも『居候先』の娘がいる。

このまま布団を出れば、俺の紳士の非紳士的狀態が明らかになってしまう！

俺の今後のためにもそれは避けなければならない。

かといって今出なければ、格闘娘の大噴火間違いないし。

絶体絶命のこの状況、どうする、俺。どうするよ、俺。

「なにしてんの？颯馬？」

「い、いや、なんでもないんだ。あのさ、俺ちよつと低血圧気味つてゆーか、その、十分くらい待ってもらえるか？先に行ってみんなでご飯食べててよ。」

「朝ご飯ならもうみんな終わったわよ。だいたいあんたは低血圧じゃないくてただの寝坊助でしょーが！さっさと来なさい！」

義弘

現代（後書き）

初っぱなからやらかしてしまった感がある。

チ力チ力

「はあ」

城の廊下で物憂げにため息をつくチ力。

腰まで届く黄色がかった長髪をもつ美女で土佐出身の大名長宗我部元親に幼少の頃から仕える家老の一人だ。

「おいおい、久しぶりに帰ってきたと思ったらもうため息か？」

突然、背後から声をかけられた。

戦の際、指揮に回ることが多いとはいえ、日頃から鍛錬を欠かし
ておらず、背後を意識することは忘れていない。事実、チ力は近づ
いてくるものがいればすぐに察知できるほどの腕前だ。

それなのに今回はまったく気がつかなかった。

驚いて振り返って見てみると、見覚えのある顔だった。

「なんだ、颯馬か」

男の名は天城颯馬。

もとは主君元親の教育係、幼少の元親を指導していた男でいまは
長宗我部家の筆頭軍師をしている。

生来のお人好しで妙に女に好かれる質。そのせいでいろいろとや
らかしていたが少し前に、滅亡した織田家の重臣だった明智光秀を
正室に迎えて落ち着いた。

「何だとは何だ。ここに戻ってくるのももう半年ぶりくらいだろ？
しかもこんなめでたい日にため息、らしくないぞ」

「はいはい、わたしだって何時までも子供じゃないんだから脳天気に騒いでられないわよ、悩み事の一つや二つふつつにあるわよ」

「たしかにそれはそうだな。ま、なんでもないならいいか。じゃあおれは部屋に戻るから」

そう言つと颯馬はもと来た道を引き返していった。

めでたい日……

今日は主君長宗我部元親が天下を統一し正式に征夷大將軍となつたことを祝つて、全国に散つていた重臣たちが一堂に会し、祝宴を開いているのだ。朝早くから始まりもうすでに日はとつぷりと沈んでいる。

もちろんチカも参加していたのだが、夜風に当たつてくると言つて抜け出していたのだ。

そう天下を取つたのだ。長宗我部家が。

土佐の豪族から始まり、国を統一して、四国を取り、尼子や毛利と激戦を繰り返した。

中央で大勢力を築きあげた織田が滅んだ後は、謀略によって追放されていた明智光秀と接触し、秀吉の野望を挫いた。

元親の幼少の頃から仕えていただけにチカの感慨も一入だ。

そんなチカがなぜ物憂げなため息をついているのかというとそれは宴会の中のある会話が原因だった。

『いやーまさか本当に天下を取ってしまったわけとは』

『あの元親様が天下人。今までお仕えしていた甲斐がありましたな
ー』

かつて無いほど豪華な料理が並び、高級な酒が惜しげもなく振る舞われる。

酒が入って各々気も声も大きくなり、各々かつての苦勞話に花を咲かせている。

そんななか

『そういえば元親様は婚儀のほうはどうなさるのでしょう？』

一人の家臣が素朴な疑問を投げかけた。

元親にはまだ嫁がない。それどころか女性と関係を持ったことすらない。

武士である以上必ず跡継ぎが必要になってくる。まして元親は將軍となったのだ。女性と関係を持つとしない元親の態度は非常に大きな問題となった。

もちろん元親がもてないというわけではない。むしろもてる。

かつては姫和子と擲掬された容姿もここ二、三年でたくましく成長し、チ力が密かに嫉妬していたつややかな長髪も今では肩のあたりでばつさりと切りそろえられている。

弱々しくふにふにした雰囲気もなりを潜め、心の強さを感じさせるいい眼をするようになった。

そんな元親だからこれまでも多くの婚儀のはなしが持ち上がっていた。

しかし元親はそれがたとえ同盟に必要であっても頑なに拒否して

きたのだった。

その理由を口にしたことはなかったが、そこにはなにかしらの強い意志を感じた。

だからチカはまともに話を聞くつもりはなかった。どうせいつもと同じ展開なのだから。

つていくのだろうと・・・

『確かにその通りですな、元親様。そろそろもの件についても考えていただかなくては』

『然り、世継ぎがいらっしやらなければ将来的に安定した政治が行えなくなるでしょう』

『將軍殿下の嫁となればそれなりの格式の大名の娘か姫武将でなければ』

『そのとおりだ』

『それならばわたしの娘はどうでしょう？器量よしで文武にも秀でてますぞ』

『いやワシの孫も負けとらん。この前なぞ・・・』

みんな半分酔っているためか主君そっちのけで大いに盛り上がっている。

しかも気がつくとならばワシの娘が俺の孫がと親バカ、孫バカ話になっている。

予想の通り徐々に無関係な方向に進んでいる。

『あー・・・盛り上がっているところ悪いがちょっと話を聞いてくれ』

そんなところに声をかけたのは元親だった。

場が一気に静まった。これも元親の成長の証し。元親に聞けと言われればどれだけ盛り上げていようと家臣たちは一瞬でその声に耳を傾けるのだ。

『婚儀にことだが・・・実は、その、ずっと前からこの女を迎え^{ひと}るって決めている人がいるんだ』

『は？・・・で、ええ！』

家臣団が騒然となった。

まさかあの元親の口からそのような言葉がでてこようとは！

『なんと！それはめでたい！』

『元親様もお人が悪い。もっと早く言っていただければお世継ぎの心配をしなくてすんだのに』

『して、そのお相手は？』

『それは・・・』

『それは？』

皆が身を乗り出して元親の言葉に耳を傾ける。主君の言葉を一言一句聞き漏らすまいとするその姿勢は家臣の鏡と言えるだろう。

『……未だ言えない』

しかし期待を裏切るいつせいに肩すかしを食らってしまった。身を乗り出していた者たちは床に倒れ伏している

『だあー！ なんですかそれは！ 人に期待をさせといて！』

『そうですこの際はつきりおっしゃってください。あなたの思い人はどこのどなたなのですか！』

広間が再び喧噪に包まれた。

元親の嫁候補は誰なのか？

貝のように口を閉ざした元親に代わってそれぞれが持論を展開し始めた。

一人があの子が怪しいと言えば他の者たちが、いやこの前立ち寄った出店の娘がどうだと言いたい放題している。

親信などもはや言語になっていない奇声を発している。

そんな喧噪のなかでチ力の心は混乱の極みにあった。

『好きな人がいる』

あの元親がそんなことを言うなんて思ってもいなかった。はじめは嘘だと思った。場を盛り上げるための嘘。

でもそれが嘘でないと理解するのに時間は掛からなかった。長い付き合いだそれくらいわかる。

わかってしまったとたん何も聞こえなくなった。

世界がグルグルと回っている感じで思考が追いつかない。

吐き気までしてきた。

だから……

『申し訳ありません。少し酔ってしまったみたいなので風に当たってきます』

苦し紛れの嘘で広間を出たのだった。

「はあ……」

もう何度目になるかわからないため息をこぼすチ力。

先ほどの広間での一件が尾を引いている。まだ心の整理がつかない。

元親とは本当に小さい頃からの付き合いになる。

土佐の一国も支配できていないようなころ、姫和子と呼ばれていた頃からだ。

だから二十近くの若造でありながら長宗我部家臣団のなかでも中心的な地位にすることができているのだ。

はじめのうちは元親のことが純粹に気に入らなかった。容姿に人一倍気を遣っていた当時のチ力にとって、自分よりも可愛い存在が許せなかったのだ。たとえそれが男であってもだ。

ひどいことをしてきたと思う。

ちよつと気に入らない友達感覚だったのだ。主君にするようなことでは決していない。

そこに教育係の颯馬がやってきてその影響からなのか元親は少しずつ変わりだして、それに比例するようにチ力との接点もなくなっ

ていった。

元親のいない生活は退屈だった。

ふと気がつくと元親のことを考えているようになった。

その時点で元親に惹かれていたのだろう。

チ力が自分の想いに自覚したのはそれから少ししてからだった。女中が元親と話していたとき楽しそうにしていたのを目の当たりにして、女中に嫉妬していることに気づいたのだった。

それからは自分のためだけでなく元親のために精力的に働いた。

率先して戦に出て、戦うだけ多くの土地を手に入れた。皮肉なことに土地が増えた分だけ元親との距離は遠くなってしまったが。それでもそれが元親のためになると思えばがんばれた。

普段は素直になれないけれど元親ならわかつてくれると思っていたのだ

「そんなわけないか・・・」

昔の自分は本当にいやな奴だった。嫌われていてもおかしくはないし一般的な大名家なら追放されていたかもしれない。

なのに自分が好きなのだから相手もわかつてくれるなどと自分本位の勘違いでここまで来てしまったのだから救いようがない。

「元親はずっと前からって言ってた・・・もっと早く言ってくれれば良かったのに」

そうすればこんなに苦しい思いをしなくて済んだかもしれない。

颯馬は知っていたんだろうか？たぶん知っていたんだろう。あの筆頭軍師殿は元親を公私にわたって支えているのだから相談ぐらい

されているのだろう。

自分よりも颯馬のほうが信用されているように思えてチ力の心はさらに沈んでしまった。

「確かにもっと早く言うべきだったよ」

「っ!!」

また後ろから声をかけられた。
しかもこの声は

「元、親？ どうして？」

そこにいたのはチ力の思い人であり主君たる長宗我部元親だった。

「ちょっといいかな大切な話があるから……とりあえず場所を変えよう」

二人がやってきたのは城内にある小さな庭、元親の部屋からしか行くことのできない元親のための特別な庭だ。

移動の際二人は終始無言だった。チ力としては元親とはできるだけ距離を置きたいし元親は元親で何とも言えない空気を出していた。

「こんなところでいったい何お話をするってのよ？」

久しぶりにとげとげしい言葉遣いになる。

多くの経験を積んで自分の立場をわきまえるようになっていたチ力だが今夜ばかりはダメだ。感情を制御できていない。

「そついうふうに言われるのも久しぶりだなあ。チ力ちゃんはそう

じゃないと」

「んな！チカちゃんっていつまでそんな呼び方するつもりよ、だいたいあんたはもう將軍様なのよ、一家臣にそんな言葉遣いするなんて・・・」

「チカちゃんだってソレ、將軍様に対する言葉遣いじゃないだろ？お互い様だよ」

そういうことじゃない！

元親の脳天気なものの言いぐさに言葉が出てこない。主君が家臣に近づきすぎるのは規律を歪めかねない。いまだに盤石とはいえない政治状況なのだから自重しなければならぬのだ。

そもそもチカと元親では身分が違う。

「チカちゃんに話したいことってのはまず、日頃の礼だ、チカちゃんがいなかったら俺は天下を取れなかったよ。ほんとうにありがとう」

「っ！い、今更そんなこと言ったって」

元親からの突然の礼にチカの言葉がつまる。

気持ちが少し楽になった。元親から認められたことが心から嬉しかった。

それでも、本当にチカが欲しいのはそんな言葉ではない。

「それと・・・さつき宴の席で言った婚儀のことなんだけど、その・・・」

またその話し、しかも今私にするなんて・・・

「まだ何も決まってるないんだ。俺が一方的に片思いしてるだけで自分の気持ちも伝えてない。だからここで全てを決めるつもりできた」

「な、なによそれ。どういうこ・・・」

逃げ出してしまいたかった。

感情が押さえ切れそうにない。

思いのままに行動できたらどれだけ楽になれるだろう。

でもそれはできない。そうしてしまえば今度こそ嫌われてしまうから、それだけは避けなければならなかった。

ほとんど泣きそうになりながらもチ力は顔を上げる。

月明かりに照らされた元親の姿がひどく幻想的に見えて、この世のものとは思えない神秘的な雰囲気その身に纏っていた。

「チ力ちゃん・・・」

元親に呼びかけられてチ力は全身から力が抜けるような心地よい脱力感に見舞われた。

元親の発する不可視の力に優しく包まれているような錯覚。

何かを決意したような強い意志を宿した瞳にチ力の視線は縛られてしまった。

「俺は・・・俺は、君が好きだ！」

「・・・え？」

何？今なんて言った？わたしが・・・好き？

「じよ、冗談は「冗談じゃない」」

「っ！」

「俺は久武チ力のことがずっと好きだったんだ」

「そんなの・・・し、信じられない。だって、わたしは、嫌われるようなことばかりして」

そうだ、自分は身勝手で騒がしくて迷惑ばかりかけていた。

主君としてすら見てなかつた時期であるのだ。

それなのにこんな・・・

「俺はチ力のことを嫌いに思ったことはない。ずっと君を想ってた。君に好かれるように努力してきた。君がいなかったら今でも姫和子のままだったかもしれない。もしかしたらとうの昔に死んでいたかもしれないんだ・・・」

元親は本来ひ弱な体格だった。武器も満足に扱えず、人の後ろをついて行くような、覇氣のない少年だった。

そんな彼に変わるきっかけを与えたのがチ力の存在だった。

厳しい鍛錬を乗り越え、戦乱の世の覇者となった原動力こそがチ力への思いだった。

「だから、俺と結婚して欲しい。俺の隣でずっと俺を支えて欲しい」

「わ、わたしで、いいの」

「君しかない」

「……わたしも元親のことが好き」

「！！それじゃあ」

「ふつつかものですよ、よろしくおねがい、します」

あまりのことに頭が着いてきていない。

まさかこんな自分を好いてくれるなんて思ってたから。
絶対に嫌われてると、そう思っていたから。

「チカ！！」

不意に元親がチ力を抱き寄せた。

「！？も、元親／／／」

「これからはずっと一緒だ。もう離さない」

「あ、あう／／／」

しばし見つめ合った後二人は初めての口づけを交わした。

翌日、二人は家臣たちの前で結婚する旨を報告した。
何かしらの反発があると思っていたのだが、皆心から祝福してく

れた。

颯馬が事前に手を回してくれたらしい。

その後長宗我部政権は歴史上類を見ない長期政権となり、二人の名は日本史上最高のおしどり夫婦として後世に名を残したのだった

チカチカ（後書き）

すごく遅れました。言い訳します。新生活が大変でした。

授業の履修？え？どうやんの？初日からレポートだと！どういこうとだ！サークル主な活動場所・・・洞窟・・・！？やめとこつてかんじでした

光秀の秘密

俺は今城内の廊下を歩いている。

目的地は上司である光秀さんの部屋である。

特に仕事の用事があるわけではない。ただ最近の光秀さんとはにかくお疲れのようで、目の下に隈までつくっているし、ときおりボ―としていと思うたら、いきなり猛烈な速度で仕事に取りかかりたりと、おかしくなったのではないかと思えるほどだ。

信長もとても心配していた。

というわけで、光秀さんの体調確認と最近の仕事状況を確認めるために部屋を訊ねようというわけだ。

「光秀さん、颯馬です。よろしいでしょうか」

「天城殿？ええ、どうぞ」

部屋の中に向けて呼びかけるとすぐに返事があった。
俺は戸を開けて中に入る。

そこにはいつも以上に疲れた表情の、というか眼が虚ろな光秀さんが頭をふらふらせながら仕事をしていた。

「ちょっと光秀さん！？なにしてるんですか！！」

これはまずい。

あきらかに働き過ぎだ。

「なにって？もちろん仕事ですよ。とにかくこれを今日中に終わらせないといけないんです」

そう言っただけに見せる書簡は今日の軍議で光秀さんが任された仕事だった。

確か期限は十日ほど有ったはず……

「その仕事は未だ余裕があります。他の仕事も終わっているようですしとにかく休んでください！」

光秀さんは織田家の忠臣、ここで倒れられるわけにはいかない。何とかして休ませようと懇願するのだが。

「今私には時間がないんです！！ほっつておいてください！！」

「っ！」

怒られた。

疲労で感情の制御ができていないのかいつもより刺々しい。だが軍師としてこの状況を放置することはできない。

「光秀さん。いったいどうしたって言うんですか？何をそんなに焦っているのですか？」

これまでの会話で光秀さんが何かにせき立てられて仕事をしていることだけはわかった。

「それは……」

光秀さんは態度を一変して口ごもる。視線も宙を泳ぎどうにも落ち着かないようだ。

「それは？」

「……言えません」

うーん。これは困ったな。

光秀さんが何か隠しているとして、織田家の害になることはまず無いだろう。ということは今後何か予定がつかまっていてそのために寝る間を惜しんで仕事をしていると？

「あの、俺に何か手伝えることはありませんか？このままでは光秀さんは倒れてしまいます。この後何かあるかわかりませんが倒れてしまつては元も子もないでしょう」

「え！？てつ手伝う！？」

突然素っ頓狂な声を出して驚く光秀さん。心なしか頬も紅い。

「大丈夫ですか？熱有るんじゃない？」

「いえ、大丈夫です……手伝う……仕事のほうか……あつちのほうを手伝ってもらおうというのは……でも男の方ですし……でも今回は当事者だし、結局は天城殿の許可は必要だからそれもアリ？」

「えーと……ほんとうに大丈夫ですか？」

ひとりでブツブツとつぶやきながら思考の海に落ちてゆく光秀さんに呼びかける。

「はい、本当に大丈夫です。天城殿にはいずれ言わなければならな

いことですしここで言うことにします」

そう言って居住まいを正す光秀さん。一分の隙もないその姿勢は光秀さんのまじめな性格をよく表している。

どうやら光秀さんはハイペースな仕事のわけを話してくれるようだ。

「その・・・笑わないでくださいね」

「大丈夫です。絶対に笑ったりしませんから」

「では・・・実は、私には趣味があるのです」

「趣味？」

いきなり何を言い出すのだろう。

話しの流れからしてその趣味が問題なのだろうけど・・・

「それでどのような？」

光秀さんの口から趣味について語られるとは意外だった。

なにせ信長をして『呆れるほど無趣味』と評されるほどで、自身でも気にしていたはずだったのだから。

「それは・・・本を書くことなんです」

「本・・・ですか」

「本です」

本を書くか・・・

光秀さんのことだからなにかの研究を本にまとめていたりするの
だろうけど、それが原因で寝不足になるというのはよくないだろう。

「光秀さん。趣味があるというのはいいことだと思います。でも、
それで体をこわしては笑い話にもなりませんよ。皆心配しているの
ですから自重してください」

「うう。すみません。わかってはいるのですが、書き始めるとどう
にも止まらなくて・・・」

もともと一つのことに集中してしまう人だから書いてるうちに朝
になるなんてこともあるのだろう。

そこまできて、光秀さんの作品が気になってきた。

「あのーもしよろしければ光秀さんの書いた本を見せていただけま
せんか？」

「わかりました。もとよりそのつもりです。今回書いた本について
は天城殿の許可が欲しかったことですし」

そういうと光秀さんはおもむろに押し入れを開けてその中から大
きな箱を取り出した。

さらにその中から小さな弁当箱ほどの箱を取り出す。
他人に見られないように隠していたのだろう。

「ど、どうぞ」

「拝見します」

光秀さんは自分の書いた本が人に見られるのが恥ずかしいのか顔を赤くして本を渡してくるので、こちらもなんとなく気恥ずかしくなってしまう。

早速最初のページを開いて中を見ると、絵に吹き出しがついている。

確かこれは最近巷ではやっている漫画とかいう大衆向けの娯楽絵本だったと記憶している。

てつきり論文の類だと思っていたので驚いてしまった。

光秀さん、漫画とか描くんだ……

とりあえずページをめくってみる。読むと言っても絵がほとんどなので簡単にページが進む。

登場人物は家中の人物をモデルにしているようで、俺と勝家殿のようだ。

絵もうまいし、特徴もきちんと捉えている。完成度が高い。これだけの漫画を描いていたなら時間がかかるのは当然だ。

漫画の内容は俺と勝家殿がなんてこと無い話をしているだけというものである。

内容にあまり変化がないのでついついページをめくる速度が速くなってしまう。

ほとんど中を確認せずに絵だけを見てみると突然、（本の中の）勝家殿が服を脱ぎだした。

「!?!」

あわててページをめくると筋骨隆々な体をあらわにした勝家殿が
(本の中の)俺に襲いかかり――

「うおおお!!」

あまりのおぞましさに本を勢いよく閉じてしまった。いや。いま
のは閉じて正解だった。間違はなくああそこからは禁断の領域^{レイヤ}。
俺が見てはならない場所だ。

「光秀さん……」

「はい？」

「何ですかこれは？」

「なにつて……衆道ですけど？」

「そんな『何当たり前のこと言ってるんですか』みたいに言わない
てください!どうしてこんなものを描いてるんですか!?!そしてな
ぜ俺が勝家殿に襲われてるんですか!?!」

光秀さん……まさかあなた、腐女子つてやつですか

「すみません。はじめて天城殿を見たときから思っていたんです。
天城殿には勝家殿だって……そう思ったら創作意欲がどんどん
湧いてきて押さえられなくなっただけです!そう、はじめはいやが
りながらも勝家殿を受け入れようと努力する献身的な天城殿……
そしてやがて二人は永遠を誓うのです」

光秀さんは語っているうちに徐々にテンションをあげていき、最後には自分の妄想に堕ちていた。

どうしてしまったんですかあなたは。

まさかこんなものを描いていたなんて……

今まで積み上げていた光秀さんに対するイメージが粉々に砕け散ってしまった。

「この本はこの後どうするんです？」

聞きたくないが聞かねばなるまい。この本が他人の手に渡ることが有れば何としても阻止しなければならいからだ。

「とりあえず印刷して予約してくれた女中の皆さんに販売します。その後様子を見て市場にも出そうかと……」

「まったく！ 予約ってどういうことですか！？ 女中の皆さんに販売？ 止めて下さいよ！！」

そんなことになったらこの家にいらなくなる！

「実はわたし、以前からこういったものを描いてまして、城内にも固定ファンができてつつあるんです。それで今回は天城殿を描くと言ったら普段の三倍もの予約がありまして、試作品の反響もすごかったですよ」

販売差し止めについては華麗にスルーして、またとんでもないことを語る光秀さん。

そろそろ目の前にいるのが光秀さんの偽物ではないかと思えてきた。普段とのギャップが有りすぎる。

「それで、どうですかこの本？」

「どうも何もダメですよこんなの。止めて下さい」

「えっ？」

何を言われたのかわからないという顔をする光秀さん。

わかるでしょ、本の中で自分と同じ顔をしたキャラが襲われてたらいやでしょう。

「で、でも天城殿はこういう経験は・・・」

「あるわけないでしょ!!」

「勝家殿をみてムラムラしたりとかは・・・」

「ありません!!はつきり言っておきますけど俺は衆道じゃ無いですから!」

「そんな!」

そんな!はこっちの台詞ですよ。ああ、なんかすごい落ち込んでる。世界の終わりを見たかのようなだ。

「勝家殿はわかって下さったのに・・・」

ん?いまなんと?

「いまなんていいました？」

おそろおそろ訊ねてみる。たのむ、幻聴であつてくれ！

「勝家殿に男として生まれた武人たるもの衆道を知らずして何とするといつたら理解を示して下さいました」

「それはあなたの言い方が悪いのですよ！そんな言い回しをしたらあの人は何も考えずに行動してしまうじゃないですか！？」

「あの方は戦以外のことはすぐに忘れてしまいますからね。おそろくもう覚えていないのでしょう・・・実演してもらえないかと思つてけしかけてみたのに残念です」

実演？けしかける？え？この人すごい腹黒い。というよりもすごい変態じゃないか。

光秀さんは変態さんなんですね。知りたくなかったですよ。

「こうなつては仕方有りません。作品の完成度を上げるために天城殿にここで協力してもらいます」

は？ここで協力って・・・何ですかそのメジャーは。

「さあ、服を脱いで！全身、体の隅々まで計測させていただきます
！」

「何言つてんですか！？あつちよつと止めて下さい！」

メジャーを持った光秀さんが俺につかみかかってくる。

突然のことに俺はなすべ無く床に押し倒されてしまう。

光秀さんが俺の上にまたがって動けないように押さえつけた上で服に手をかけてくる。

「ダメですつて光秀さんてば！聞いて下さいよ！」

「待ちません。聞きません。そんなことをしたらあなたは口八丁手八丁で逃げてしまいますからね・・・フッフ」

光秀さんの目からは輝きが失われていた。

なんか怖い。

女性とはいえ前線で活躍する武人である。

ほとんど体を鍛えていない俺では、光秀さんの拘束から逃れられなかった。

もうダメだ・・・

そう思ったときだった。

「見舞いに来たぞ光秀・・・・・・・・・・・・・・・・」

勢いよく信長が入ってきた。

「「え？」」

それは誰の口から出たのであろうか。
一瞬で空気が凍り付く。

「信長様・・・・・・・・」

「光秀 - - - - -」

しばしの硬直。そして・・・

「えっ？あっ？ひやああああ」

奇妙な声を発して光秀さんが俺の上から飛び降りる。

どうやらここにきて自分が何をしていたのか理解したらしい。

顔だけでなく首筋まで茹で上がったタコのように真っ赤に染まっている。

ため込んだ疲れが前後不覚の状態を作っていたのだ。

「光秀・・・・・・」

「はい」

「なにをやっつておるのだおまえは - - - - -」
「 - - - - -」

その後光秀さんは信長と何時間も話し合ったそうだ。

翌日からはまた普段通りの光秀さんに戻っていた。過程はどうあれ一件落着かな。

数日後

「光秀」

「はい、信長様」

「新刊は」

「ここに」

「こ、これはまた・・・うむ。よくできておる。これから頼むぞ」

「もちろんです。全身全霊を込めて描かせていただきます」

こうして光秀には強力なパトロンが生まれた。

光秀の秘密（後書き）

元ネタはニコ動で見た初代戦極姫のプレイ動画です。

天城殿『も』という部分ですね。

大内騒動

ある日の昼下がり俺は久しぶりの休日を堪能していた。

当初、新参者ということで軽視されていた俺の意見も陶隆房殿とともに尼子氏の軍勢を撃退した功績が認められて最近では軍議でも発言が許されるようになってきた。

それに伴って仕事量も増え続け、今となつては満足に寝ることがすらできないほどだったのだが、今日、めでたく休みを取ることができたのだった。

「うーん。さすがにもう眠くないしな、なにをしようか」

人間というのはずっと眠り続けることはできない。お天道様が高く昇った今となつては暑くて布団にはいることはできない。

どうしたものかと思案していると、部屋の外から声をかけられた。

「天城殿はいらっしゃいますか？」

「ああ、相良殿。どうぞ、お入り下さい」

そう言つと、戸が開きメガネをかけた少女が入ってきた。

『相良武任』

俺が仕えている大内家の重臣で頭脳とも言つべき人物。

「どのようなご用件でしょう」

自分よりも立場が上ということもあつて姿勢を正して対応する。
見ればその手にはいくつか書簡が握られている。

「実は今私が担当している仕事が煮詰まっています、天城殿のご意見を伺いたいと……」

「はあ、たしか新しい商業都市についての構想でしたっけ。俺の意見などあまり参考にならないような気がします」

自分などより相良殿のほうがずっと頭が切れるし知識も多い。俺自身文官だからわかるが彼女の力量は俺を遙かに上回っている。

「い、いえ。天城殿は様々な土地を渡り歩いていましたから色々な行政政策について知識がおりかと思ひまして」

「はい、それは確かにそうですが……しかし知識ならば相良殿のほうが……」

「私の知識など書物を読みあさつて得たものに過ぎません。その場を訪れ肌で感じた意見を聞きたいというのではいけません」

確かにその通りかもしれない。百聞は一見にしかずともいうし。

「そういうことでしたら……」

「颯馬、じゃまするよ!」

お話ししようという言葉は突如現れた闖入者によって阻まれてしまった。

戸を開けると同時に室内に飛び込んできたのは陶隆房。

西国無双の侍大将ともよばれる大内家切つての武闘派の武将だ。
最もその外見は元気が有り余った女の子なのだが……

「ん？なんだ相良、颯馬の部屋で何やってんだよ」

「それはこつちの台詞だ！人の部屋に突然飛び込むなんて非常識だとは思わないのか！？」

あーまたか。どうにもこの二人、とてつもなく仲が悪い。普通に生活していてもいがみ合っているくらいだ。武断派と文治派という枠組みに分かれてしまっているということもあってなかなか解決できないでいる。俺も仲を取り持ったりはしたんだけどなあ。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。隆房は俺に用があつたのか？」

「あ、そうそう。颯馬今日休みでしょ？一緒に訓練しよーよ！」

うん、元気があるのはいいことだ。でも、訓練つてそれ仕事だよな。少なくとも休みの日にすることじゃないよね。

そのことに関しては相良殿も同じ意見のようで。

「あなたはバカですか？休みの日に訓練などしてどうするのです？その冗談は笑えないので止めてくれませんか？」

「はあ？颯馬は毎日部屋にこもって書類仕事してたんだよ。休みの日くらい体動かさないとカビが生えて死んじゃうつての。あたしからしたら休みの日に書簡を持ち込んでくる奴のほうがどうかしてると思うけどね」

隆房はビシッと俺の前に広げられた書簡を指さした。

別にカビは生えないが、たしかに隆房の言っていることも一理ある。結局今俺のしていることは相良殿の仕事を手伝っていると言われてもおかしくないようなことなのだ。

「ねーねー颯馬あ、こんな本の虫なんて相手にしてないで外いこーよー」

隆房はそう言うや否や座っている俺に近づき、あろう事が背中から首へ腕を回しおんぶする形でくつついてきた。

「!？」

「んな!？」

隆房にとつては自然な行動なのだろうけど俺からしたらとんでもないことである。

なにせ年頃の女の子に抱きつかれているのだ、年頃の男である俺としては如何ともしがたく

(落ち着け、落ち着くんだ、俺!心頭滅却すれば火もまた涼し!)

目を閉じ、必至になって隆房を意識しないようにする、が、そうするほどに背中に伝わる二つの感触が鮮明なってくる気がするのは男の性か。

このまま樂園に旅立つのもいいかもしれないと思った矢先。

「いつまで引っ付いてるつもりだ!天城殿も迷惑しているだろ、離れろ!」

武任が隆房の襟をむんずと掴んで颯馬から引きはがそうと力一杯

引っ張った。

「ぐえっ!？」

引っ張られた隆房がそれでも離れるまいと腕に力を込めたために
のどが激しく圧迫されてしまった。

「はーなーれーろー!」

「いーやーだー!」

「ぐっごああ!？」

死ぬ!？死んじまう!？

「天城、殿も、すっかり、してください!こんなと一緒にいると、
天城殿の、頭まで、カビて、しまいます!」

「こんなの、って、なんだよ、あと、あたしは、カビてない」

「は、なし・・・」

さつきからカビ、カビと、俺は乳製品か!などというツッコミを
いれる暇はない。なにせ西国最強の武将に締め上げられているのだ。
意識を保つだけで精一杯だ。

「だいたいつ、どうして陶のことを名前でっ呼んでるんですか!？
私は姓なのに!？」

「ふん。もしかして妬いてんの?みっともな!」

「妬いてなんかいい歳して人の背中にくっついてるような奴にみつともないなんて言われる筋合いはない!!」

窒息しかけでぐおんぐおんと揺さぶられているのでせつかくの感触を堪能する余裕すらない

「颯馬さん。一緒にお茶しませんか？」

そんな騒動のさなか、部屋を訪れたのはほんわかしだ印象の武将冷泉隆豊だった。

一見すると侍女にみえなくもない外見だが、その実武勇に秀で和歌も堪能な知勇兼備の武将として知られている。

そのため普段から武断派と文治派のあいだを駆け回る羽目になった苦勞人である。

「お、隆豊」

「冷泉殿」

隆豊の登場で二人の動きが止まった。その隙に隆房の拘束から逃れる。脳が心臓が酸素を求めて爆走している。

「えーと・・・なにしてたんですか？」

状況が飲み込めないという顔で三人を見る隆豊。それも無理もないことなのだが。

「なにつて、颯馬と一緒に外行こうとしたらコイツが邪魔してさー」

「邪魔したのは陶のほうでしょ！こっちが先約だったの！」

「はあ、そうなんですか……って、ダメダメ、ダメですよ！
颯馬さんはわたしとお茶するんですから！」

隆豊さん、あなたもですか……

「茶なんていつでもできるじゃん！」

「お茶にはいろいろな準備がいるんです、今日のために茶葉まで用意してたんですから！」

ギヤーギヤーと人の部屋で再びけんかを始まる。二人から三人になったことでさらに騒々しくなってしまった。

「わかりました。こうなったら天城殿に決めてもらいましょう」

「えっ！？」

「お、珍しくいいこと言うな。そうしよう。颯馬、あたしと訓練するよな」

「先約はこちらだと言っているでしょう。さあ天城殿お話の続きを」

「颯馬さん、颯馬さんのためにいいお茶を仕入れてきたのです、さあ！」

「え、えーっとお」

なんでこうなった!?

だれか選べなんて選べるわけがない。誰か一人選んだ時点で間違はなく自分は死ぬ。そうならずとも今後の大内家中でも生活に支障は出るだろう。

戦場でもないのにどうして究極の決断を強いられているんだ!?

「「「さあ!」「」」

無茶苦茶だあ――――――

それは動乱の中に消えた歴史的一幕。まだみんなが同じ旗の下にいた、そんな時の光景。

大内騒動（後書き）

大内騒動といいつつ大内さんは出てきませんでした・・・

戦極姫3発売と言うことで書いてみました。個人的には陶さんと冷泉さんは3の中

でも気になっているキャラです。3買っていないですけどね。

今回は越後（前書き）

一部キャラ崩壊。注意。

今回は越後

上杉が天下をとり、ある程度の仕置きを済ませた秋の午後。

「うーむ・・・」

日は高く上り、雲ひとつない透き通った青空と黄色と赤に染まった木々のコントラストが美しい。

「うーん」

そろそろ夏の暑さか和らいで、幾分か過ごしやすくなってきたこの時節。

おだやかな陽気に包まれた城内の廊下をうなりながら歩いている人物がいた。

青みがかった短髪。青を基調とした衣服。そして特徴的な『愛』の前立。

上杉謙信が第一の家臣。直江兼続だ。

最近どうにも精神的に落ち着かない。

戦乱が終わって、気が緩んだか、と考えて普段は仕事に打ち込んで紛らわせるも、今日は休みを言い渡されている。暇をもてあましている状況だ。

「んーんん？」

兼続の視線の先、ちょうど部屋から出てきた瘦身の少しくたびれたような男。

兼続にとっては敬愛する主君に近づく不貞の輩。であったが、上杉にとってはなくてはならない人物であり、紆余曲折のすえに謙信

と恋仲になったヤツ。

「おい、颯馬」

「ああ、兼続殿」

「どこかに行くのか？」

「少し城下のほうに……以前の政策が機能しているのか見てみようかと」

以前の政策とはこの城の城下町を活性化するための商人の誘致などの諸政策を言っているのだろう。兼続も一部に関わっている。

そこで、ふと兼続に妙案が浮かんだ。

「それならわたしも行くこう」

「えっ！？いや、しかし」

「いいじゃないか、ちょうどひm、んっわたしも関わった話だしな」

今、暇って言いそうになっていたような、と呟きそうになるが、口には出さない。拳が来るだろうから。

「わたしが行くと問題があるようなことか？何かいかがわしいことでも……」

「していませんー!!」

兼続、こと上杉の風紀に関しては特に厳しい。颯馬には半ば八つ当たり染みて当たるところがあるが、基本的に真面目が服を着ているような性格だ。

ということもあつて城下町。

「ふむ、やはり活気付いているな」

颯馬が町を見回し、満足げに呟く。

城下町にやってきた二人は最近整備したばかりの中央街道にそつて歩いていたが、政策の効果もあつたのか、天下平定まえに比して桁違いとも言うべき人の数となっていた。

「謙信様が治めているのだぞ、至極当然のことじゃないか」

兼続は主君の偉大さをまるで自分のことのように誇らしげに語る。兼続の目から見てもここ最近の町の発展は想像以上のものがある。乱世が収まり、領民がそれぞれの仕事に精を出すことができるようになった、生活水準があがってきた証左といえよう。

「さて、見たいものは見ましたし、戻りますか」

「ま、まてまて。戻るのは早くないか？」

颯馬の言に自分でも驚くくらいに反応してしまった兼続。颯馬も

驚いた様子で兼継を見る。

「いや、えと、せつかく見るならいろいろ回ったほうがいい。人が増えているのだから表面を見るだけでは事足りないだろ」

なんといいのか押し付けがましい理論である、が、言ってることは分からなくもないので、颯馬はそうですねと同意しておいた。

「うむ、そうなんだ」

ほう、と胸を撫で下ろした兼継であるが、実のところ内心とまどつていた。

いくら暇を持て余していたとはいえ、わざわざ颯馬と城下を巡らなくてもいいわけだ。

それがわたたと拙い言い訳をして颯馬を引きとめてしまった。自分でも考えていなかった完全に不測の事態だった。

そもそも何を安堵しているのだわたし！

というように混乱の極みにいた。

「あの、どうかしました？」

「なんでもない、行くぞ！！」

百面相をする兼続に不審感を持ったのか颯馬が尋ねるのだが、強引に話をそらしてドンドンといってしまふ。しかたなくその後をついていく颯馬であつた。

先に行く兼続はとある店の前で立ち止まった。のぼりを見ると甘味処とある。

「よし、いくぞ颯馬」

「へ？いや、でも」

そうしている間にも兼続は店内に入ってしまった。

颯馬も後から入店する。するとそこにはもうすでに菓子をつまんでいる兼続の姿があった。

「まあ、座れ颯馬」

「はあ」

先ほどから普段の兼続らしからぬ行動に鳩が豆鉄砲どころではない颯馬だ。日常的に颯馬をいじる兼続だ。何か裏があるのではとかんぐってしまうのも無理はない。

と、そこで兼続が食している菓子に目がいった。色とりどりの小さな粒。

「あの、兼続殿。それはいったいなんでしょうか？」

「ああ、これか。これは金平糖という砂糖菓子だな」

「砂糖菓子ですか。はじめてみました」

歴史において日ノ本の中心は常に京である。鎌倉など栄えた都市は他にもいくつか存在するが、それも常に京の都を手本としていた。そんななか越後は京から遠く離れた田舎の国。文化に関しては遅れをとっていて、謙信の代でも近畿の大名が鉄砲のような最新装備をしていたのに対し、上杉軍は鉄砲隊を組むのにずいぶん苦労した

ものだ。

しかし、それも昔の話。

上杉が天下を取って以来、この国の中心は越後に移ってきているといっても過言ではなく、南蛮渡来の貴重な品が越後まで届くようになっているのである。

砂糖菓子という貴重品も例に漏れない。

「だが、さすがに南蛮渡来。値が張るんだ」

「まあ、そうでしょうね」

完全に人事のように流す颯馬。

兼続はもはや日本のNO.2金の心配などする必要はないはずだ。

「値が張るんだよ。颯馬」

もういちど言おう。金の心配などする必要はないはず。

「颯馬……」

「わかりましたよ。払います！！払えばいいんでしょう！！」

颯馬自身高給取りなのだが、あいにくの貧乏性。出来るだけ金は使いたくないところであるし、戦乱の中で稼いだ金子は秘密工作に流用したためにすっからかん。今ある金は一度出奔して、戻ってからの貯蓄になる。

颯馬は謙信では絶対に出来ないような、手を汚すような仕事を進んで引き受けていたこともあり、天下統一後に一度出奔している。その颯馬を謙信が一人で探し出して連れ帰ってきて今に至るのだが、謙信が颯馬を探している間、上杉の政務を一手に引き受けていたの

が兼続である。

そういつた事情もあつて兼続に頭の上がない颯馬であつた。

「うむ。よろしい」

「はあ・・・」

沈んだ顔で金子入れを確認する颯馬。幸いにして中身はそれなりにあるようだ。

それにしても・・・

金平糖をポリポリと食べる兼続を眺める颯馬。

「ん？なんだ、わたしの顔に何かついているのか？」

そんな視線に気がついた兼続が颯馬に尋ねた。

「いえ、なんか可愛いなーと」

「うぐ！？ごほごほッ、な、なにをばかにゃ！」

つい口走ってしまった颯馬は、ヤバッと思い殴られる覚悟をきめたのだが、兼続のほうも意表を突かれて咽、あまつさえ舌を口元を押さえている。

「ああ！？兼続殿、大丈夫ですか？」

「うぐぐ・・・い、いきなり変なことを言うからだー！」

目じりに涙を溜めつつ、頬を上気させて兼続が言う。

「もういい、次いくぞ次！！」

照れ隠しか、食べかけの金平糖を袋ごともってとつと店を出て行つてしまい、颯馬があわてて支払いに走るようになった。

その後も行く先々で兼続があーだこーだと注文をつけ、颯馬は自分お金子入れがどんどん薄くなつていくのに戦々恐々しながら、兼続が帰ろうと言い出すのを祈っていた。

「お、これなんかよさそうですね」

そんな中で颯馬から店先にいったところがある。

女性用の装身具を売っている店であつた。店先に並ぶのは、色とりどりの様々な絵柄の櫛。

「なんだ颯馬、そんなものを持って。上杉に女装趣味の軍師はいらんぞ」

「そんなんじゃないですよ。ただ謙信様にお似合いだなと思ひまして」

「う、む・・・確かにその色は謙信様にお似合いかもしれんな。こんなときでも謙信様のことはちゃんと考えているのだな」

ズキリと胸の奥に鈍い痛みが走つたような気がした。

「ふん、謙信様に変なことをしてみる。いくら恋仲といつても許さぬからな」

「変なことなんてしませんよ！」

「お前の言うことは信用ならん！」

「理不尽ッ」

あまりの横暴さに愕然とする颯馬の様子にさらに兼続は腹が立った。

「わたしは帰る!!」

そう言って颯馬を残して戻ってしまった。

その夜。

うつ・・・さすがにやり過ぎた。

今度は頭を抱えながら、颯馬の部屋に向かう兼続。

城に戻ってから、部屋の箆って自己嫌悪の渦にいたが、ウジウジしているのも性に合わないということで、潔く颯馬に謝罪しようと思いついたのだ。

「颯馬・・・いいか？」

「兼続殿？ええ、いいですよ」

障子戸から返ってきた返事を聞いて中に入る。

「その・・・わがママが過ぎた。すまなかった」

颯馬の前で頭をたれる。

思い起こせばこれが初めてのこともかもしれない。

「ええっ？ 兼続殿頭をお上げください！ まったく気にしていませんから！」

驚き桃の木山椒の木。まさか、兼続がここまでしてくるとは夢想不到にしていなかった颯馬は心底驚いた。

しかしながら、兼続との掛け合いは最初から大抵このような感じだ。上杉に来て数年。もう慣れた。

「いや、しかしだな」

「ほんとに気にしないでください。今日は俺も楽しめましたし、兼続殿がそんなことだとこちらの調子も狂いますから」

「そうか、ならお前の言うとおりにしようか」

そうしてこの日のことに關しては和解することが出来た。

その後、少しばかりの雑談をして、兼続は部屋を後にしようとしたのだが。

「あ、兼続殿。どうぞこれを」

颯馬が差し出してきたのは綺麗な装飾の施された櫛。

「これしてくれるのか？」

「はい」

「しかしな、わたしにはこういったものは似合わないと思うぞ」

「そんなことはありません。兼続殿はご自身で気づいていないだけで魅力的な女性なんですから似合わないはずがありません」

「！？お前はまたそういうことを・・・」

自然、頼が熱を帯びるのが分かる。

面と向かって魅力的などといわれるのははじめてであるし、そういった観点から褒められることに慣れていないのでしどろもどろの対応になる。

こいつのこれは天然なのか？

本人が否定してはいるがキクゴロー曰く颯馬は女好きという話だ。仮に天然でこれなら周囲がそう思ってしまうのも無理はないかもしれない。

「と、とりあえず貰っておく。それと、そういうことはおいそれと口にするなよ」

そうして颯馬の部屋を後にした兼続であった。

すでに日は沈み、庭のすぐそばを通る廊下には月明かり以外の光は存在しない。

それでも兼続の足取りは軽く、先ほどまでの落ち込んだ気分がウ

ソのようであつた。

そんな兼続が曲がり角を曲がろうとしたそのとき、不意に声をかけられた。

「兼続」

「ひゃ!？」

突然の呼びかけに心臓が飛び出すかと思つた。

兼続が通り過ぎようとした柱の影から現れたのは小柄な女の子。天下人の上杉謙信その人だつた。

「謙、信様? いかかなされたのでしょうか?」

突然の登場に驚きはしたが、それ以上に謙信の纏う尋常ならざる氣に兼繼は大いに萎縮した。

「いや、なに。休暇の日にまで働く家臣の労を労おうかと思つてな」

「えと・・・それはまさかわたしのことでしょうか?」

なぜか兼続の背に冷たい汗が流れた。

「それ以外に誰がいるというのだ? まったく、久しぶりの休みにまで『仕事』をするのは、わたしが言えたことではないが控えたほうがよいぞ。体を壊しては元も子もない」

「あの・・・わたしは今日はお休みをさせていただいていました
が」

「ほう……では颯馬と出かけたのは私用であつたのか……
楽しめたか？」

「！？」

息を呑んだ。

そしてまずいことになった。謙信は政務を投げ出して颯馬を探す
ほどに入れ込んでいる。一途である。

故に今回の一件知られたのは非常にまずい。後ろめたいことはな
いけれど。

そもそもどうして謙信が今日のことを知っているのか。

相貌を細め、兼続を注視する謙信。

空気が重い。筋一本動かせないほどの重圧。フレッシャー。

「ふむ。だが、兼続は颯馬とそこまでの仲ではなかったな。ああ、
颯馬の仕事を手伝っていたのだな。相変わらず真面目だなあ。『仕
事』熱心な家臣を持ててわたしは幸せだぞ」

「謙、信、様？」

謙信はすーと滑るように移動すると、グワシッと兼継の肩を掴み、
全霊の気を込めてこう言った。

「『仕事』の報告を聞こうか、兼継」

翌朝、文字通り真っ白になった兼続が廊下で倒れているのを定実
が発見、保護したものの軍議は欠席。

颯馬も腰痛を患うと同時に日ごろの疲れが出たのか体調を崩し、
欠席した。

ちなみに謙信は上機嫌だったという。

俺の妹がこんなに・・・・・・・・・・（前書き）

なんてものを書いてしまったんだろうと反省しています。

でも書きたかったんだ！！

俺の妹がこんなに・・・・・・・・

その日、俺こと天城颯馬はそれなりに重要な任務についていた。

つい先日まで俺の主家である島津家と争っていたとある国人衆がついに降伏したので、その戦後処理をまかされたのだ。

ぶっちゃけていうとやることなんてそんなにない。

歳ちゃんや家ちゃんが大体片付けてしまっていたし、こちらの要求が呑めないとあれば全力で潰しにかかる脅せばもうどうにもならない。

これまでにいくつもあつた支城や広大な領土はその尽くを義弘に攻め落とされ、本城も泡や落城というところまで追い詰められているのだから。

そこまでしてなぜ降伏を受け入れたのか、と聞くと。

「この国の国人を纏め上げるためにあそこは生き残ってもらったほうが都合なのです。そんなことも分からないのですかバ力颯馬」

と、詰られてしまった。

「はあ、とにかく話を纏められて良かった・・・これで失敗してたらと思うと」

久ねえや家ちゃんとはかく、義弘と歳ちゃんに関しては。

「この、バ力颯馬！！」と全力で殴られたり、「初めから期待してはいませんでした」と心を碎かれたりしていただろう。

ぞつとしない。

それでも、俺は敵城主との会談を終えて最良の結果を導き出したのだからそのようなことにはならないだろう。

ならない、よな・・・

若干の不安を覚えつつ、山城を後にした俺は数人の共を連れて本城まで戻る。

日も暮れ始めている。少し急がなければならぬか。

紅く染まった空が徐々に濃い蒼に変わり、やがてそれは深い闇に取って代わられる。

城下町を抜け、農村を通り、やっと島津領といったところでそれは起きた。

「ぎゃああああ!!」

「!?!」

叫び声。同時にガシャンという具足の音。

共の一人が倒れている。その背には矢が突き立っていた。

「敵!?!」

「おのれッ裏切ったか!!」

ばかな、ここに来て裏切りだとッ!?

アリエナイ。しかし目の前で倒れている仲間は確かに射られている。

さらに左右の藪から槍が突き出され、月夜に鮮血が舞う。

「ぐあああああああ！」

飛び出してきたのは十にも満たない数だが、暗闇で不意を打たれた事が痛かった。そもそも俺の部隊は会談に臨むために大それた装備をしていなかった。

臆したか、と思われなかったために。

結果、俺たちは顔も見えない敵兵に次々と討ち取られていった。

「くそ、このッ」

俺も刀を抜いて必死に応戦する。一人斬り捨て、二人斬り捨て、しかしそこまでだった。

「ガッ・・・」

後頭部に強かな一撃を貰い、湿った地面に倒れこんだ。

みんな・・・ごめん・・・

薄れ行く意識の中でただ四人の顔だけが浮かんでいた。

「・・・・・・・・・・」
「は」

蠟燭の仄かな明かりに照らされたそこは、石造りの壁だった。
ひんやりと冷たい石の匂い。
窓一つないやけに広い密室。
地下牢と見える。

「そうか、俺はあの時・・・」

夜襲を受けて捕まってしまったんだろうか。
じゃら、という音がする。

壁に繋がった鎖が俺の頸に繋がってる。

しかも両手も同じ。鎖で床に固定されている。

手も足も出ないとはこのことだ。

なんて悪趣味な。

床は畳なんだな、と益体のないことを思ってみても状況が好転する気配はなし。

敵に生け捕りか。

よりもよってこんな最悪な展開になってしまっなんて。

はあ、義弘に殺されても文句は言えんなあ。

「クソ・・・」

ここにいる以上五体満足で帰れる保証は全くない。

いまや、俺の命は風前の灯だ。

見上げてみても何も変わらない視界。音すらなく、完全な虚無。

蠟燭の火の揺らめきだけがこの世界で俺が生きているのだと教えてくれる。

そのとき、ゆらつと火がゆれた。風だ。

そして、コツ、コツと足音が聞こえてくる。

今気が付いたが、部屋の隅に階段があり、その上のほうに扉がついている。

階段を降り切った人影が歩み寄ってくる。

捕らえた俺の世話係か、それとも尋問、拷問の類か。そう思って身をこわばらせていたが、明かりに照らされたその顔は俺の最も見知ったもので、だからこそ、その事実が飲み込めなかった。

「え……」

「やっと目が覚めましたか。相変わらず寝ぼすけですね。バカ颯馬」

「歳、ちゃん」

「それ以外のなにに見えると言っんです。目がおかしくなりましたか？」

この物言い。間違いなく歳ちゃんだ。

でも、なんで。

「どうしてここに。助けに来てくれたのか」

「そうですよ。それにここはわたししか知りませんし、世話をするのもわたしだけですしね」

「あの、それはいい……」

「知りたいですか」

歳ちゃんは置いてあった机に手に持っていたもの。握り飯を置く
とそう言った。

知りたいって？そりゃ知りたいだろう。

「ああ、教えてくれ。あれからどうなった。ここはどこだ。他のみ
んなは無事なのか！？」

俺はとにかく情報が欲しかった。あれから何日たったのかもそう。
島津軍の動きも気になる。一緒にいた兵のなかで無事だった者はい
るのか。

部屋に声が反響する。幾重にも重なって聞こえるそれが収まった
とき、歳ちゃんは静かに口を開いた。

「まず、颯馬がここに運び込まれてから二日がたちました。その間
に島津家は家久を中心に兵を集め、明後日にかの城に総攻めをかけ
ます」

・・・・あれ

「これから城攻めなのか。もう終ったんじゃないか」

「当然でしょう。たった二日で総攻めの用意ができるはずないじゃ
ないですか。今回はそれこそ城にいる者皆尽くまで斬りにするん
です」

「ッ!!」

なで斬り、だと。

「なんで、そこまでするんだ。それじゃあこの国の国人衆はおるか、民たちにも島津の統治に不安を示すものも増えてしまっじゃないか」

「そんなこと、分かりきっているじゃないですか。颯馬を殺されたんですから、弔い合戦くらいしますよ。わたしたち姉妹の中で、お兄ちゃんを殺されて黙っているのは一人もいませんよ」

「そ、うか」

「そうです」

歳ちゃんにお兄ちゃんって言うてもらえるのは何年ぶりだろう。それなのに何故か喜べない。逆に自分でもよくわからない不安が胸のうちに湧き上がってきた。

「あのさ、俺が殺されたってどういうこと？俺、ここにいるんだけど」

「島津家の重臣、天城颯馬は二日前に降伏してきた敵城に使者として赴き、その帰路を襲われて奮戦虚しく共とともに討ち取られてしまいました。しかも、それだけにとどまらず、その遺体は切り刻まれて無残に打ち捨てられてしまったのです。辛うじて握り締められていたお守りがその『遺体が颯馬である』と告げていました」

「な、にを言ってるんだ……歳ちゃん」

「颯馬は最期に島津家の役に立ったのです。あの城を攻め落とす口実を実に分かりやすく作ってくれました」

あの城を攻め落とす、だと。

だが、それは歳ちゃん自身が拒否した策のはずだ。このあたりの国人衆を束ねていた家を武力で無理矢理落としても根強い反抗が予想されるから、と。

そのために時間と金をかけて根回しをしてやっと降伏、開城に持ち込んだんじゃないか。

「颯馬が思っていることなら想像が付きまします。なぜ、降伏した連中を攻めるんだということでしょう。・・彼等は結局わたしたちにとつて邪魔なだけなんですよ。だから討たねばならないのです。しかし降伏してきた相手をこちらから攻撃すれば大問題。島津の名声は地に落ちます。・・しかしそれも謀略によつて重臣を討たれたとあつては話は別。大儀の元に戦を仕掛けることができます。島津は正義で彼等は悪。こうなれば国人衆も島津と矛を揃えるしかありません。結果島津家は完全にこの国を統治下におくことができるのです」

返す言葉がない。

まさかそこまで考えていたなんて。

本当に敵に回したら恐ろしい娘だなあ。

「それじゃあ、俺はいつ外に出られるんだ？」

「出られませんよ」

・・・・・え

「出られるわけじゃないですか。この作戦は『天城颯馬が討た

れた』ことが前提なんですから、お兄ちゃんが出て行ったらわたしたちから計略を仕掛けたことがばれてしまうでしょ」

だからダメ

「なにを・・・それじゃあ、俺はずっと・・・」

「うん、ずっとここで暮らすの。そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。わたしがずっと一緒にいますから」

ぞくり

冷たい風が背筋を撫でたような気がした。俺は夢でも見ているんだろうか。

「ま、まってくれ、他のみんなは！？久ねえとか義弘とか家ちゃんとか！みんなどうして・・・」

「ッ！」

「う、ぐ」

鈍い音が響いた。ぶたれたのだと気づくのに少し時間がかかった。だってそうだろう。あの歳ちゃんが殴りかかってくるなんて思わないだろ。

「あ、ごめんなさい・・・でも、お兄ちゃんが悪いんだよ。わたし以外の名前を呼んだりするから」

申し訳なさそうな、それでいてこちらを非難するような表情でそ

「言うつ歳ちゃん。」

「でも、特別に本当のことを教えてあげる」

「本当のこと？」

「この作戦は、表向きの理由。正直どうでもいいの。彼等がどうなるうと、弘ねえと家久がいるから他の手はいくらでもある。でもそれだと問題があるの、分かる？」

「・・・いや」

「分かるはずがない。というよりもこの時点で俺の思考は止まりつつあった。」

「ただ返事を返すことしかできない。」

「ふふ、それはね、お兄ちゃんを手に入れられないことだよ」

「？」

「わからない？・・・みんなお兄ちゃんのことを好きなんだよ。久ねえも弘ねえも家ちゃんもわたしも。いままで気が付かなかった？ 気づかなかったよね、お兄ちゃんは鈍感だもんね」

「歳ちゃんは普段の冷静沈着な落ち着いた口調ではない。どちらかというと家ちゃんのような明るい言葉で、語る。」

「みんなこう思ってたの・・・このままずっと、みんなと一緒にいたい」って。でも島津を背負ったわたしたちは何れ子を産まなきゃいけないでしょ。そうなるとやっぱり相手はお兄ちゃんな訳だけど。」

わたしね不安になったんだよ。お兄ちゃんが他の人を選んでしまうんじゃないかって・・・久ねえのほうが胸は大きいし、弘ねえとは歳が近いし、家久は可愛がられてる。わたしが勝てるのはお兄ちゃんへの想いだけ・・・そんなときにね、分かっちゃったんだあゝ解決策が。部屋にあるお人形みたいに、お兄ちゃんをずっと手元に置いておけばいいんだって」

小躍りしそうになっている歳ちゃんを俺は呆然と眺めることしかできない。

「それからは大変だったんだよ。わたしの屋敷に秘密の地下室を造ったり、お兄ちゃんと背格好の似た人を探したり、家久の目を誤魔化すのが大変だったけど、でもうまくお兄ちゃんを使者にしてその帰りを襲わせることもできた。そして首を落とした身代わりの死体を置いて、お兄ちゃんを運び込ませた。多少不審な所があっても、誰も気にしない。だって皆冷静じゃないから。細かいところは気づけない。唯一『それなりに』冷静だったわたしが喪主を務めてしまえば、その不審な点も誤魔化せる。もう真実を知る者はいない。協力してくれた方達にも死んでもらいましたしね」

どうして、こんなことに・・・

俺のせいなのか。俺が歳ちゃんをこんなふうにしてしまったのか。

「聞いてます？」

「ぐあッ!？」

太ももから鋭い痛みを感じ、俺の意識が思考の海から浮上する。歳ちゃんの握り拳が太もものうえに叩きつけられている。じくじくとした痛みは猶も続く。

「そ、れ」

握られた拳の合間から見える鈍い光。

引き戻された歳ちゃんの手に収まっているそれは、女の子の手に似つかわしくない無骨な鉄。

五寸釘。

長い釘を太ももに叩きつけていたのだ。

歳ちゃんは恍惚とした表情で釘についた血を舐めとった。

その瞳は狂気と懸想の入り混じった、ひどく妖艶な瞳。

「お兄ちゃんの痛みを堪えてるトコロ。すごくイイ。もっと、見せて」

「あ、ぐう、やめろ、歳ちゃん」

傷口を広げるように、釘をねじ込んでくる。思わず苦痛の声を漏らす。

「どうして？こんなに想ってるのに・・・でも、そうだね。お兄ちゃんを助けてあげなきゃいけないんだからこれじゃだめだよ。でも逃げないでね。もしそんなそぶりを見せたら、コレで縫い付けちゃうんだから」

「どうして。どうしてだよ、歳ちゃん。どうしてそんなふうに」

「お兄ちゃんと一緒にいるため。お兄ちゃんを他の女から守ってあげるためだよ。お兄ちゃんを見ていいのはわたしだけ、お兄ちゃんと話していいのもわたしだけ。お兄ちゃんは血の一滴から言葉の一

言まで全部わたしの物・・・ん、ちゅ」

押し付けられた唇。

初めての接吻はほんのりと鉄の味がした。

「それなのにあの人たちは、本当になつてない。まるで盛のついた雌。人の男に手を出そうとするなんて、ありえないよね」

しだれかかる歳ちゃんが頬、首筋と唇を落としている。

「お兄ちゃんが悪夢でうなされてることに気づかないで好きだ、なんてお門違い」

なに・・・

「なんで、そんなことを知ってる。誰にも言っていないはずだ」

確かに俺は悪夢にうなされている。

内容は決まってあの日。

一族が滅ぼされたあの時の光景だ。そのことをいまだに引きずっている俺は、それでもずっと秘密にしてやってきた。

「お兄ちゃんのことはずっと見てましたから。気づかれないように遅くまで働いて、悪夢と戦いながら、今までよく島津のために頑張ってくれました。お兄ちゃんは立派ですよ」

「歳ちゃん？」

「誰も知らないなんて事はないのです。わたしはちゃんと見てました。だからわたしはお兄ちゃんを守ってあげます。悪夢から、戦か

ら、島津から。もうお兄ちゃんが苦しまなくていいように」

……でも、それじゃ、俺の夢は誰も傷つかない、俺のような
思いをする者のいない世を創ることができない。

「大丈夫です」

歳ちゃんは言い切った。

「お兄ちゃんの夢はわたし達で叶えます。既存の敵国が全て相手に
なったとしても、もう島津を止めることはできません。みんな、『
天城颯馬の夢』を守るために死力を尽くしますから」

そうだな。

四姉妹が本気になれば、そりゃ誰も止められないよな。
でも、そこには

「お兄ちゃんの居場所はありません」

そうか、そうだよな。

俺が今さら戻っても家中を混乱させるだけ。なら、俺はこのまま
のほうがいいかもしれない。二度も居場所を失った俺に居場所なん
かあるはずもない。

島津全体から見ても役立たずの無駄飯喰らいがなくなったのだ
からよかったのかもしれない。

「そんなことはありません。わたしがお兄ちゃんの居場所になつて
あげます。わたしだけがお兄ちゃんの味方です」

「歳ちゃん」

ありえないことに俺はその言葉に心を動かされていた。
今までの話を聞く限り、歳ちゃんが黒幕なのに、歳ちゃんが俺の居場所を奪ったのに、なぜか歳ちゃんのことを愛おしくなってしまう。
った。

前後左右も分からない暗闇の中で一筋の光明を見出したかのように、俺は歳ちゃんに縋るしかなかった。

「これからはずっと一緒ですよ。お兄ちゃん」

俺を抱きしめる歳ちゃんはそう言った。

俺の答えはもう決まっている。

「ああ・・・そうだな」

そして、日本史上最悪の惨劇を始点にして、島津の歴史は加速して行った。

歳久は颯馬と以前にいたしていたと偽り、颯馬の子を出産。生まれてきた子に天城姓を名乗らせ、以後四百年、島津幕府の中枢に位置し続けることになった。

俺の妹がこんなに・・・・・・・・・・（後書き）

さり気に一話に続きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2557s/>

戦極姫 ごったに短編集

2011年12月2日02時51分発行